

インド世界の形成

ヒンドゥー教の神々

ヒンドゥー教の多種多様な神々を偶像の形で崇拝するが、とくに尊崇されているのはヴィシュヌ神とシヴァ神である。ヴィシュヌ神はもともと太陽神で慈愛に満ちた神とされ、妃はラクシュミー（吉祥天）。大蛇を寝台とし金翅鳥を乗物とする。十種の化身を現わして人類を救済するが、その化身は魚・亀・猪などのほか大叙事詩「マハーバーラタ」の主人公クリシュナ、「ラーマーヤナ」の主人公ラーマ、ブッタ（釈迦牟尼）などからなる。シヴァ神はヒマラヤ山中でヨーガの修業を行う苦行者で、恩恵を与えるやさしい神としての面と、破壊者としての恐ろしい神の両面をもつ。妃はヒマラヤ山の娘である美しい女神パールヴァティーで、息子にガネーシャ（聖天）とスカンダ（韋駄天）があり、虎の皮の敷物に坐し、白い雄牛ナイディンを乗物とする。初期にはブラフマー（梵天）神も世界の創造主として尊崇されたが、のちヴィシュヌ神とシヴァ神にその座を譲った。

アーリヤ人がインドに現われるはるか以前、インダス川流域に先住民族の築いたインダス文明が栄えていた。アーリヤ人は先住民族を征服しながら東南に歩を進め、前 600 年ごろにはガンジス川の上・中流域に大小の国家を建設し、カースト制度の原型もほぼこの時代にできあがった。その後マウリヤ朝・クシャーナ朝の時代に、バラモン教その他の諸宗教が栄えたが、グプタ朝時代に、ヒンドゥー教とカースト制度にもとづく独自のインド社会が形成されていった。

2300頃	インダス文明おこる
1500頃	アーリヤ人、パンジャーブに定住
1000頃	アーリヤ人、ガンジス川流域に進出 アーリヤ人、鉄器の使用開始
800頃	ガンジス川流域に 16 大国成立
563頃	ガウタマ=シッダールタ誕生、異説 463 頃
549	ヴァルダマーナ誕生
———	ナンダ朝、北インド統一
327	アレクサンドロス大王のインド侵入
300頃	メガステネス、パータリプトラ訪問
260	アショーカ王、カリング征服
244	アショーカ王、第3回仏典結集（伝）
———	ギリシア人、パルティア人、サカ族、西北インドに侵入

————	大乘仏教おこる
150	カニシカ王、第4回仏典結集（伝）
180頃	ナーガールジュナ（竜樹）誕生
241	ササン朝がクシャーナ朝を支配
320頃	チャンドラグプタ1世 ～335頃
376	チャンドラグプタ2世 ～415
399	法顕、インドに求法 ～412
————	詩聖カーリダーサ活躍
543	南インドにチャールキヤ朝 ～12世紀
606	ハルシャ・ヴァルダナ即位 ～647
629	玄奘、インドに求法 ～645

1 インダス文明とアーリヤ人

インド亜大陸では前2300年ごろから前1800年ごろにかけて、インダス川流域を中心に都市文明が栄えた。これをインダス文明といい、代表的遺跡にシンドのモヘンジョ＝ダロと、パンジャーブのハラッパーとがある。この文明の特徴は整然とした都市計画にあり、大小の道路が格子状に走り、道路沿いに窯焼き煉瓦れんがで作られた家屋が並び立っていた。青銅器、彩文土器、まだ解読されていない象形文字を刻んだ印章などが出土し、支配者の居住区であったと考えられる城塞には大浴場、穀物倉、作業場なども設けられていた。この文明を築いた民族にはついては、まだ明らかでないが、前1800年ごろから、都市文明としてのインダス文明は急速に衰えた。

中央アジアに住んでいたインド＝ヨーロッパ語族のアーリヤ人は、イランを経てインドに侵入し、前1500年ごろまでにパンジャーブ平原に住みついた。当時のアーリヤ人の社会は、部族を単位に構成され、農耕を主としながら牧畜も行っていった。部族は同時に戦闘単位で、軍事指導者である族長に率いられて先住民を征服し、彼等を奴隷にした。アーリヤ人は自然現象に神聖さを認めて崇拜し、供物と讃歌を捧げた。このような讃歌と儀礼を記したものが「ヴェーダ」で、最古の「リグ＝ヴェーダ」は前1200年ごろから前1000年ごろまでに作られた。

アーリヤ人は前1000年ごろガンジス川流域に進出し、そのころから鉄の農具と武器とを使い始め、先住民を征服しながら土地を開墾し、村落社会を形成していった。やがて村落から都市がおこり、族長を王とする小王国が建設された。社会の発展とともに階級が生じ、やがて種姓（ヴァルナ）とよばれる身分の区別ができた。それは祭式をつかさどるバラモンを最上位とし、政治・軍事にた

ずさわるクシャトリヤ、農業・牧畜・商工業に従事するヴァイシャが続き、大部分が征服された先住民からなる奴隷のシュードラを最下位とするもので、各種姓にそれぞれの宗教的義務と日常生活のおきてが定められていた。バラモン教のつかさどるヴェーダの宗教をバラモン教といい、宇宙と自我とを一致させること（梵我一如^{ぼんがいちによ}）により宗教的自由（解説^{げだつ}）をえられると説いたウパニシャッド哲学も現われた。

ガンジス川流域の小王国の王権は発達し、前6世紀には上流域のコーサラ国と中流域のマガダ国を中心とする、いわゆる16大国が成立した。このころには、王は部族を超えた専制君主と化し、国家の領域を定め、行政機構と軍隊組織とを整えた。王であるクシャトリヤの権力はバラモンをしのぐものがあり、都市の商工業の発達によってヴァイシャの社会的勢力も高まり、このような時代を背景に、前500ごろジャイナ教と仏教が成立した。

ヴァルダマーナ（尊称はマハーヴィーラ）の開いたジャイナ教はバラモンの権威を否定し、人間は苦業によってのみ救済されると説き、不殺生など厳しい戒律を定めた。現在のネパール南部のシャカ族の王子ガウタマ＝シッダールタ（尊称は釈迦牟尼）の開いた仏教も、バラモンの権威を否定し、八正道（正しい信念・決意・言葉・行為・生活・努力・思想・瞑想）を行うことによって輪廻からの解脱をえられると説いた。彼の弟子たちは出家教団（サンガ）を作って修行に励み、支配階級や富裕な商人のあいだに多くの支配者をえたという。

2 統一国家の出現

このころマガダ国はしだいに勢力を伸ばし、コーサラ国を破ってガンジス川流域の大部分を支配して、仏教・ジャイナ教を保護した。その後もマガダ国は着々と領域を広げ、前4世紀に同国のナンダ朝が北インド一帯を支配した。同世紀後半にアレクサンドロスが北インドに攻め入り、その撤退後の混乱に乗じ、前317年ごろ、チャンドラグプタがナンダ朝を倒してアウリヤ朝を開いた。

チャンドラグプタはパータリプトラ（現在のパटना）を首都とし、ガンジス川流域一帯に支配を確立したあと、インダス川流域のギリシア人勢力を駆逐した。その後、パンジャーブに侵入したシリアのセレウコス1世を撃退して、アフガニスタン南部を割譲させ、第3代のアショーカ王のときには、最南端部を除くインド亜大陸の大部分を統一した。マウリヤ帝国は典型的な古代インドの専制国家で、アケメネス朝ペルシア帝国にならって中央集権制をとり、よく組織された官僚と強力な軍隊が王の権力を支えた。軍隊には歩兵・騎兵・戦車隊・象軍があったという。

アショーカ王は即位9年めに東部海岸のカリング王国を征服したが、征服戦

争の悲惨さに心を打たれ、すすんで仏教を保護するとともに、ダルマ（法）に基づく政治を理想とし、その精神を領内各地の磨崖碑に刻ませた、ダルマは普遍的倫理を意味し、特に従順・節制・慈悲・不殺生が強調され、その徹底を期してみずから領内を巡回し、また地方官吏に管轄区域を5年ごとに巡察させた。

アショーカ王の没後マウリヤ帝国は急速に衰え、50年ほどで滅亡した。その後インドには統一的帝国は出現せず、バクトリアを追われたギリシア人と、イラン人のパルティアとサカ族とがあいついで西北インドに侵入した。オクサス川上流域で大月氏に服属していたイラン人のクシャーナ族も、1世紀には独立してクシャーナ朝を建て西北インドに侵入した。

クシャーナ朝はカニシカ王のときに最盛期を迎え、ガンダーラのプルシャプラ（現在のペルシャワル）を首都とし、中央アジアから西北インドにわたる大帝国を築いた。ガンダーラは中国・イラン・インドを結ぶ交通路の交わるところで、クシャーナ朝は国際貿易の支配によって繁栄した。またこの地にはヘレニズム文化が浸透し、最初のうち仏像を作らなかった仏教徒も、この地でギリシアの彫刻の影響を受けた仏像を作り始めた。

カニシカ王も仏教を信じ、この時代に仏教は西北インドを中心に大いに発展した。この時代には、個人の救済を目的とする従来の仏教（部派仏教）にあきたらず、菩薩道を唱えて万人の救済を目的とする人々が現われ、彼等はみずから大乘仏教を称した。2～3世紀のナーガールジュナ（竜樹）は、大乘仏教の理論を確立した学者として知られる。従来の仏教はその後も行われ、特に上座部仏教はセイロン島を中心に栄えたが、大乘仏教徒はこれを小乗仏教とよんで区別した。

マウリヤ朝がインド亜大陸の大部分を支配したため、アーリヤ人の文化が南インドにも伝えられ、デカンにサータヴァーハナ朝がおこった。同朝の王家はバラモンの出と称し、バラモンの宗教と種姓制度の移植に努めたが、領内では仏教も盛んに行われた。当時南インドではローマおよび東南アジアとの海上貿易が盛んで、ローマ貨幣をはじめとする遺物が多数出土している。

3 ヒンドゥー教の世界

カニシカ王の没後クシャーナ朝は衰え、北インドは政治的に分裂していたが、4世紀の初めにマガダ国の故地で勢力を確立したチャンドラグプタ1世は320年にグプタ朝を開き、次の王の時代に王朝の基礎が築かれた。第3代の王チャンドラグプタ2世のときに最盛期で、グプタ朝はアラビア海からベンガル湾に至る北インド一帯を支配する大帝国を建設した。東晋の僧法顕がインドを訪れたのは、この王のときである。しかし5世紀半ばから王位継承の争いが続いて国力は衰え、ついでエフタル族の侵入によって西方の領土を奪われ、グプタ朝

は6世紀の半ばに滅んだ。

グプタ朝の滅亡後、北インドの各地に地方政権が分立して争ったが、7世紀の初めにヴァルダナ朝のハルシャ王が北インドを統一した。王は仏教を信じてその保護に努め、みずからも戯曲を書いて文芸・学術を奨励した。唐僧玄奘がナーランダー僧院で仏教を研究したのは、この王のときである。しかしハルシャ王の没後国内は分裂し、12世紀のイスラム教徒の侵入まで、インド各地にヒンドゥー諸王朝が分立していた。

グプタ朝の代々の王はバラモンの宗教を尊び、ヴェーダの定める王の祭式を守り、種姓制度を社会秩序の基本とし、サンスクリットを公用語とした。同時にバラモンに土地を施与し、領内の村落に定住させて祭式をつかさどらせるとともに地域社会の指導者として秩序の維持に当たらせた。種姓ごとの宗教的義務や日常生活のおきてを定めた「マヌの法典」は、それ以前の法典の集大成であるが、グプタ朝時代に現在のような形にまとめられた。

代々の王のこのような施策もあって、グプタ朝のもとでヒンドゥー教が発展した。ヒンドゥー教はバラモン教と民間信仰とが融合し、それに仏教の影響も加わって自然にできた宗教で、開祖も特定の教義や経典もなく、いわばインド人独自の思考と生活の様式と言えよう。古いヴェーダの神々に代わってシヴァ・ヴィシュヌ・クリシュナといった神々が尊崇され、これ等神々の象徴や偶像が作られ、それを祭る寺院が建てられ、またこれ等の神々は各地の神話の主人公として活躍する。

グプタ朝時代はインド古典文化の黄金時代で、サンスクリットの世俗文学も発達し、カーリダーサの戯曲「シャクンタラー」などの傑作が著わされた。二大叙事詩「マハーバーラタ」「ラーマーヤナ」の原型は、ジャイナ教・仏教の成立のころに作られ、その後少しずつ書き加えられたと考えているが、現在のような形にまとめられたのはグプタ朝時代においてであった。特定の経典をもたないヒンドゥー教徒にとって、それは「ヴェーダ」と並んで事実上の経典となった。また医学・数学・天文学などの学問も発達し、その成果の多くは、イスラム教徒によって継承された。グプタ朝時代に完成されたヒンドゥー文化とヒンドゥー教的な社会秩序は、インド亜大陸の各地に広がり、現在までインド社会を規定している。